

羌繡を売る女性たち

——災害復興と女性の就労——

松岡 正子

はじめに

2008年汶川地震後、被災地の四川西北部のチャン（羌）族⁽¹⁾農村では、女性たちが、家屋の復興作業のかたわら、集まって羌繡づくりに励む姿があちこちでみられた⁽²⁾。羌繡は、チャン族女性の伝統的な「女紅」（手仕事）の一つで、母から娘に代々伝えられている。被災後、政府は、これを国家級非物質文化遺産に認定してチャン文化復興のシンボルとし、同時に、その商品化によって農村女性に新たな就労機会を提供するという「扶貧工程」（脱貧困プログラム）を推進した。

しかし、被災後10数年を経て、羌繡プログラムは必ずしも当初の目的を達成できたとはいえず、様々な矛盾が表面化している。そこで、本稿では、羌繡と女性たちに関わる矛盾や課題の背景と意味について、「羌繡を売る女性」という視点から分析する。

-
- (1) チャン族はチベット高原東端の海拔2千数百メートルの高山峡谷地帯に居住する山の民である。人口30万9,600人（2010）、四川省西部の阿壩藏族羌族自治州の茂県、汶川県、理県、松潘県および綿陽市の北川県、平武県、甘孜藏族自治州の丹巴県、貴州などに分布する。商代の「羌」の末裔ともいわれ、四川の岷江流域に定住して2千年以上を経る。固有の言語をもつが文字はない。白石を崇拜し、シビ（シャーマン）が伝える独自の宗教をもつ。長期にわたって漢族と交流し、漢化の進んだ集団とされる。
- (2) 松岡【2017：写真篇】参照：茂県县城（50、51頁）、茂県坪頭村（55頁）、茂県太平村（64頁）、邛崃市直台村と木梯村（86、90頁）、汶川県羌鋒村（95頁）、汶川県羅卜村（99頁）、汶川県龍溪村（102頁）。

1. 羌繡を売ることの意味

(1) 羌繡の起源伝承

羌繡は、チャン族古来の技術ではない。チャン族は、本来、麻を栽培し、女性が麻糸を紡いで麻布を織り、麻服をつくった。中国における木棉栽培や綿業については、「宋末・元初の頃から陝西方面と広東・福建方面とを起点として拡張され、それが明代になると全国的に普及……（南北両地帯の長所を兼具した）松江府下において綿業が商品生産として発足する」とあり、松江府で盛行した理由は、「この地が宋代以来南海貿易の一起点であったために、元初の頃に棉種の伝来が行われて木棉栽培が普及し……、元初には南方からすでに高級な技術が伝来され、加えて中国在来の絹織物技術が応用された」とある〔西嶋 1976 : 733〕。

チャン族自身は、棉栽培や綿布生産はしていない。彼らは、糸や針、綿布を村にくる行商人から買い、あるいは県城に薪や漢方薬材等を売りにいってもち帰った。羌繡は、綿布や糸とともに明清以降、漢族地区から伝えられたと推測される。羌繡の伝来については、『中国民間文化集成・四川卷』に、汶川県威川郷のYS（男性、当時80歳、文字が読めない）の語りとして次のような「姜維的伝説」が収められている⁽³⁾。

三国時代、黒水のチャン族が反乱を起こした時、孔明はチャン族出身の母をもつ姜維將軍を派遣し、危機に遭ったら開くようにと2つの紙包を贈った。姜維が茂州の羌王に協議をもちかけた時、王が、武芸に秀でた王女との闘いに勝ったら応じると答えたため、姜維は山地での戦いに臨んだが、敗れて絶壁まで追い詰められた。孔明の紙包を思い出して開いたら、一枚の花圍腰（刺繡された前掛け）と「羌女神英、用此迷心」と書いた紙があり、急いで王女に花圍腰を贈り、平地での再戦を願った。平地での戦いでは、姜維が勝利し、以後、王女は戦いに出なくなり、汶川（現四川省阿壩州汶川県内）を平定することができた。実は、圍腰の刺繡は孔明が呪いをかけた「符」であった〔中国民間文学集成・四川

(3) 王通ら論文〔2020 : 46〕には同様の孔明伝説が『四川省志・民族志』から引用されている。

巻編輯委員会 1998：1136-1137]。

西南少数民族地区には、孔明軍との戦いの伝説が広く分布している。チャン族地区にも、漢族と頻繁な接触のあった北川県に、孔明軍に負けて土地を奪われたという「孔明一箭之地」伝説が伝えられている。また、孔明＝漢文化を背景に、新たな道具や技術が孔明によってもたらされたという物語も少なくない [李福清・白嗣宏訳 1992、松岡 2020：214-217]。羌繡の伝来もその一つと考えられるが、真偽は別として、この羌繡由来譚は以下を示唆している。

一に、刺繡という技術は漢族から伝来したものであり、チャン族自身の技術ではない。二に、刺繡＝女性がすべきこと、女性らしさという概念は、漢族から導入されたものである。これは、漢族社会の「男耕女織」、すなわち男性は外で農耕に従事し、女性は家内で機織りをするという性別分業の概念であり、やがてチャン族女性の社会的指標となった。換言すれば、チャン族には、元来、女性を家庭内に閉じ込める「男耕女織」の概念はなく、むしろ生産や諸活動における貴重な人力であった。

三に、闘うチャン族の女性という伝承は、決して荒唐無稽な話ではない。チャン族居住区の東隣に位置し、類似した風俗習慣をもつギャロン・チベット族には、女性が社会を統治する「東女国」伝説が伝えられている。ギャロン・チベット族社会は、現在も男女を問わず第一子が戸主となる習慣があり、婚姻は妻方居住と夫方居住が半々で、慣習的に女性にも男性と同様の社会的地位と発言権がある。また、チャン族やギャロン・チベット族などを含む四川西部の「藏彝走廊区」⁽⁴⁾には、ジャバ・チベット族のように母系的家族制度を継続する社会が現存している [馮 2010]。藏彝走廊区のチャン族やチベット族には、漢族社会とは異なる、社会的発言力をもつ女性の姿があったことが示唆されている。

(4) 「藏彝走廊区」とは、費孝通が1980年前後に提起した歴史、民族、文化に関する区域概念。岷江、大渡河、雅砻江、金沙江、澜沧江、怒江が南北に流れる四川、雲南、西藏自治区に跨る地域をいう。松岡 [2017第6章] 参照。

(2) 羌繡の機能と呪力

孟燕ら編著 (2014) 『羌族服飾文化図志』は、四川省民族研究所が中心となって調査編集した初のチャン族服飾専門書で、服飾に地域的特色をもつ11の地域⁽⁵⁾を選び、それぞれの典型的な服飾の特徴や民俗的機能を詳細に記している。

地域差は、特に、女性の頭布や前掛け、鞋に明確である。例えば、「鞋」は、地域によって図案が異なるが、機能は社会全体で共有されており、社会の秩序を表象する。鞋は、男女 (性別)、老人と中青年 (年齢別)、婚礼と葬式 (儀礼別) などによってはき分けられ、自身の立場や場面を表出する [孟燕ら 2004 : 73]。女性たちは、母 (女主人) や嫁という立場で家族のために各村に伝わる独自の羌繡をする。理県休溪村では、女性は10歳になると鞋作りを始め、嫁ぐまでに100~200組作り、婚入時に10数「背」の鞋をもっていく (背負い籠1個 = 1「背」 = 10組の鞋)。これらはチャン族の他の地域でもほぼ同様で、嫁の能力と勤勉さを示し、それが嫁の新家庭および社会における評価となる [孟燕ら 2004 : 73-74]。

では、なぜ、羌繡がそれほど重要視されるのか。嫁ぐために100~200組の羌繡鞋を作って贈与するというのは、時間的にも労力的にもかなりの負担であり、実用性というだけではなく、そこに込められた力に重要な意味があった。特に、チャン族独自の雲紋に関しては、以下の3つの「雲雲鞋伝説」に神や祖先との関係が語られている [孟ら 2014 : 47-48]。

伝承1は、史詩「羌戈大戦」の一段に登場する。チャン人は神の教えで先住の戈基人に勝利した後、感謝を表すために、白石を神の表象として奉じた。さらに、白雲の形状を鞋に刺繡して雲雲鞋を作り、青年にはかせた [四川阿壩州文化局主編 1988 : 33]。史詩「羌戈大戦」は、チャン族で最も知られた移住伝承である。中国の西北縁辺から岷江流域に辿り着いた祖先は、そこで先住民戈と遭遇して戦い、神の啓示によって雪塊を武器として勝利し、定住した。以来、白石は家屋屋上の中央や四隅に奉じられ、家神を表して家人を守ると伝えられている。雲雲鞋の事は、本来の羌戈大戦にはなく、後付けであるが、白雲は白石と同様に神の力を表すものとして

(5) 理県の休溪、汶川県の羌鋒、茂県の黒虎・三龍・納普・曲谷・叠溪、松潘県の鎮坪・大爾辺、北川県の青片・納布の11か所である。

刺繡され、青年を守ると信じられた。

伝承2は、貧しい羊飼いの青年と海の鯉魚の娘との恋愛譚で、娘は天上の雲をさき、羊角花を摘んで美しい雲雲鞋を作り、青年に贈った。以来、女性は雲雲鞋を作って恋人に贈った [同：417]。これは、チャン族の貧しい羊飼いと天神の娘が結ばれてチャン族の始祖となる史詩「木姐珠」⁽⁶⁾の変型である。また、伝承3は、「大禹王的故事」で、夏朝の聖王大禹の妻、涂山氏は禹が雲上を歩くように、飛ぶように山河を進めるようにと鞋に2つの色鮮やかな雲を刺繡して贈り、大禹は治水を完成させた [張力編 2001：24]。大禹は「生于西羌」(『史記』)とあり、四川の歴史学界ではチャン族の祖として論じられる [松岡 2017：106-112]。大禹にまつわる雲雲鞋の伝承も鞋に超能力を与えた後付け型である。

これら3話の原型はみな、シピ(チャン族のシャーマン)の經典に取められた神との交流を語る伝承であり、雲紋には人力を超越した神の力がこめられている。羌繡は、母や妻によって無償で作られて家族に贈与されるものであり、利益を得るために売買されるものではない。そのため羌繡は多ければ多いほど災いを祓い、人を守る力を表すと信じられたのであろう。

2. 羌繡の伝承と刷新

(1) 非物質文化遺産の認定と传承人、

被災直後の2008年6月、政府は、甚大な被害を受けた茂県や北川県、汶川県などを「羌族文化生態実験区」とし、さらに羌笛の演奏と製作技術、瓦爾俄足節、多声部民歌、羊皮鼓舞、羌繡を「国家級非物質文化遺産」に登録した。ただし、これらの登録は、被災した伝統文化の保護と伝承を第一の目的としており、それ自身の文化的価値というよりも、復興の一項目という政治的意味合いを強くもっていた [松岡 2017：194-197]。

実は、1990年代前後から、チャン族社会では旧来文化の衰退が進んでいた。全国的な経済発展の影響を受けて、村では青年層の出稼ぎが恒常的

(6) 木姐珠(木吉卓)は、シピの經典に取められ、新年を迎える時に語られる。人間界の牧童、チャン族青年「斗安珠」が天界の王女「木吉卓」と恋をし、結婚するために天帝から出された難題を解決する。解決法には焼畑農耕が反映されている [四川省編輯組 1986：161-166]。

になり、さらに九年制義務教育の普及で子供たちも県城の中学校に寄宿しながら通い、あるいは小学校から県城など近隣の都市部で教育を受けるようになった。被災後、親たちは村に家屋を再建することよりも、就学あるいは就職する子供のために都市部にマンションを購入し、青年層の多くも都市部に居住することを望んだ。その結果、村に常住するのは50歳代以上が主となった。若い世代を中心とした非農民化は、村落という生活空間で伝承されてきた伝来の技術の必要性を失わせ、様々な伝統文化の継承を難しくした。

羌繡もそのような伝統文化の一つである。2000年頃からチャン族の民族衣装を日常生活で着る者が減り、年長の女性以外ではほとんど着なくなった。羌繡も、子供たちが就学や就職で家を離れたために娘が母に学ぶ時間がなくなり、親自身も学校の勉強を第一として、教えることがなくなった。そのため羌繡の伝承は、1990年代頃から各地で途絶えはじめ、90年代以降に生まれた女性はほとんどができない。女性にも、義務教育を受けて普通語を流暢に話せれば、都市部で現金収入を得る就業の機会がうまれた。特に、低賃金ではあったが飲食店のサービス員などの働き口があり、義務教育後にさらに進学すれば教師や公務員、技術をもつ専門職にも就くことができた。筆者の定点調査地であり、伝統の維持が比較的よいとされる茂県雅都郷でも、母に羌繡を学ぶ娘の姿がみられたのは1990年代半ば頃までである。

一方、中央政府は、経済発展に反比例して進む伝統文化の衰退に対して、その保護にのりだし、古村落や非物質文化遺産の認定をすすめ、観光開発によって持続可能な発展を促した。チャン族に対しても、1996年に汶川県を「中国民間芸術——羌繡之郷」とし、羌繡の非物質文化遺産伝承人を認定した。第1回は、州級に汶川県3人、北川県5人、県級に汶川県2人、理県1人が認定され、被災直後の第2回は、省級が茂県3人、汶川県3人、理県1人、県級に汶川15人が認定された [孟燕ら 2014: 316-317]。伝承人は、被災前から歴史的に漢族との交流が深い汶川県に多い。また民俗村として被災前に観光開発が進んでいた汶川県羅卜村や理県桃坪村、北川県青片郷小溝子などでは、羌繡や食文化が観光資源として売り出されていた。北川県は、茂県に隣接した西部地区以外は、1950年代にすでにチャン族

としての文化的特徴が廃れていたため、1980年代以降、政府主導のもとで茂県などから羌文化の導入と復興が図られた⁽⁷⁾。よって第1回の北川県の5人の伝承人の認定には政治的配慮が大きいと推される。

政府は、伝承人に対して、補助金を毎年支給して経済的支援を行っている。陳文苑〔2017：7〕によれば、茂県では州級で年3000元、県級で年2000元を支給し、伝承人の数も省級4、州級3、県級1に増やした（2017年）。しかし、伝承人はほぼ40歳以上の中高齢者であり、当面の消滅の危機はくい止めることができるが、次世代への伝承については、伝承人指定制度は効果が薄い。また、被災によって複数の伝承人が亡くなっており、羌文化の衰退は人的側面においても深刻である。

(2) 次世代の職業意識と羌繡

都市で教育を受けた若者は、故郷の農村では農業では収入が確保されないため、多くが都市部へ行って非農民化している。また、政府の新城鎮化政策のもと、被災後は高山部農民を中心に、河谷部への集住化や近距離の県城などへの一家をあげての自主的移住が推進された〔松岡 2017：69-92〕。

では、近年、若い世代はどのような職業に就いているのか。進学できる者は、地元の県城などで公務員や教師、専門職として働く。雅都郷のチャン族の場合は、元来、漢方薬材など（民国期にはアヘン）を街に売りに行くという行商の伝統があったため、男性は漢方薬材をグループで行商したり、装飾品やチベット風の骨董などを屋台や各地の規定の場所で売ったりして稼ぐ。夫婦で各地を行商する例も増えている。運転を習って運送業をする者もいるが、事故のリスクが高い。成功者は、元手を貯めて都市部に場所を借り、商いをする。女性は、老親の世話をしながら、農村では農作業の手伝いや季節労働、街では服務員や屋台での商いなど収入を得るための仕事であれば、何でもする。男女ともに、少ない資本からでも始められる商いに従事する者が少なくない。

被災後、観光開発が進められた県城や沿線の農村では、羌繡は政府の保

(7) 松岡〔2017：138-139〕参照。

護策のもとでチャン族文化を代表する一つとして注目され、若者も、現代化とは逆の「土」文化として軽んじていた自民族の技術を文化的経済的に価値あるものとして見直し始めた。しかし、被災後数年もたたないうちに被災地への世間の関心が薄れ、羌繡ブームも冷め、羌繡の収入は激減した。例えば、北川県の四川綿陽繡娘有限公司においても被災数年後には羌繡ブームが消えて利益が激減し、経営の中心を羌繡以外に変更した。また繡娘は固定給から出来高制になって一日の平均収入が50～80元に減った。若い繡娘は、大都市に行って別な仕事につき、老人の扶養のために村に残る者以外は、ほとんどが羌繡生産から離れた [謝 2016 : 118]。

3. 羌繡を売る：商業化、産業化へのプロセスと課題

(1) 羌繡合作社、羌繡企業の設立と課題

政府は、復興の目標の一つに「扶貧」(貧困脱出)をあげ、羌繡による農村女性の就業プログラムをうちだした。羌繡合作社の設立は、それを実現化する第一歩の施策であり、「家庭に居ながらにして現金収入を得る」をスローガンとした。

王通ら論文 [2020] では、そのプロセスと課題について次のように報告する。被災後、政府は「阿壩州婦女就業幫扶中心」⁽⁸⁾を設け、「中国伝統工芸新興計画」と「羌繡幫扶計画」のもとで、農村女性が参加する合作社の設立を勧めた。その結果、阿壩州には29の合作社(汶川県18、理県8、茂県2、松潘県1)が設立された。うち71.5%は資本金50万元以下の小規模経営である。合作社は、生産を女性が家庭で行い、企画や販売を合作社が担う形態で、会社組織に比べて低資本で設立可能であり、女性は家庭で製作を請け負って収入を得ることができ、販売の心配がない。ただし、請負単価は低く、出来高制であるため低収入で、あくまでも家計を助けるという副業の位置づけである。一方、合作社にとっては、農村女性による羌繡は、商品としては技術水準が低いうえに生産性も低く販路も狭くて、利潤が少ない、よって多くの合作社が経営不振である [王ら 2020 : 46-

(8) 阿壩州政府、成都文化旅游集団、中国紅十字會、李連烈壺基金の合同で設立された [鍾ら 2012 : 182]。

48]。

さらに、このような合作社不振は、「核心」社員と「辺縁」社員からなる組織の二元構造にあると指摘する。合作社は、設立時に資本金を必要としたため、村内で資本金を供出できる商店経営者や企業経営者、富農といった有力者や羌繡伝承人らが「核心」社員となり、経営責任を負うことで利益の大部分を享受した。これに対して一般の農村女性は、出資金を必要としない辺縁社員として羌繡を請け負い、販路の心配をする必要はないが、低収入である。例えば、汶川羌山羊角表情羌繡加工專業合作社では、核心社員 CZE が年収19,700元であるのに対して、辺縁社員は日当20元にすぎない。そのため羌繡製作者の43.45%が合作社に入りたくないという。Y(女性46歳)の場合は、月収100~200元で、年収2,000元にもみたくない。そのため羌繡を請け負っていた女性の半分は、日当が50元以上の建築現場や、県の羌城での踊りショーにでた。羌繡製作につきものの頸椎痛や頭痛もないから楽だという [王通ら 2020 : 48-49、51]。

王通論文が、合作社の経営不振を社員二重制度によるものとする指摘は注目される。羌繡合作社が資本金を必要とする利益集団と規定され、出資に応じた利益分配を原則としたことが、社員の二重制度と社員間の収入格差をうんだ。当初から貧富の差を前提とした組織制度を作ったことが、貧困女性およびその家族を相対的な貧困状態のままにし、貧困から真に脱出させることができなかつたのである。

さらに、羌繡の商品化、ブランド化が遅れていることも大きな課題である。羌繡は蜀繡や蘇繡のように歴史的に洗練され、商品化された刺繡とは異なり、家族間での贈与を目的とした、より原初的な刺繡である。被災後に国家級非物質文化に認定された時点でも、なおその段階にあり、売れる土産品の多くが低価な小物であったため、請負の羌繡の単価は抑えられ、農村女性の収入は一般の服務員の平均月収をも下回った。より高収入の仕事も選べる若い世代の女性がなかなか羌繡製作に対して興味をもてないのは、羌繡の価値が社会的、経済的に可視化されていないことによる。

(2) 羌繡企業の設立と課題

陳文苑論文 [2017] によれば、茂県の羌繡企業の状況 (2017年1月)

は次のようである。4つの羌繡合作社と1つの羌繡協会があり、主な羌繡企業として①四川羌寨繡庄有限公司、②四川興繡藏羌工藝發展有限公司、③茂県西羌繡坊發展有限公司がある。これらの合作社は、年間の平均売り上げ500万元、総生産量8,000件で、就業者は500余人。経済的にも政策的にも県政府からの支援は大であり、2014年には①が40万元、②が25万元の工藝美術専攻資金援助をうけた [陳 2017: 7]。

このうち四川羌寨繡庄有限公司は、羌繡省級伝承人の李興秀が総経理である。李興秀は1961年に茂県松坪溝で生まれ、6歳から羌繡を母に学んだ。1992年31歳の時に茂県県城に6人の弟子とともに民族衣装の縫製店を開き、94年に全国初の羌族民族服製作と羌繡生産加工専門の「羌寨繡庄店」を設立した。羌繡の技術をもつ農閑期の女性を雇って技能研修を行いながら彼女たちに現金収入の道をあたえ、一方で、羌繡の商業化を目指して現代風のデザインや文様を加えた民族衣装の創作や、新商品として羌繡を施したお土産や生活用品をうみだした。さらに2004年に店を「四川羌寨繡庄有限公司」に発展させ、九寨溝や北川県城、成都に支店をおいた。一方で、就業をめざす女性を対象に羌族刺繡技能培訓班を開いて技術技能の伝授や水準の向上に尽力し、阿壩州羌族刺繡協会会長を務めた [鐘茂蘭ら 2012: 166-169]。

筆者も2008年被災直後に李興秀さんにインタビューしたが、新たな工場用地獲得のために金策に苦心していた時で、政府関係者に熱心な働きかけを行っていた。羌繡の改革と普及にとっても熱心で、身体障害者の女性たちを積極的に雇用し、全部で100名あまりの羌繡女性がいるという話だった。2016年に再会した時は、羌繡の第一人者として州や県の政府機関との密なつながりがうかがわれた。

李興秀は、1990年代にすでに羌繡の存続と発展を女性の就労問題と併せて捉えており、常に先頭にたって様々な新しい方法を試行している。まず、94年の羌寨繡庄は、民族衣装の手作りが衰退しているなかで、チャン族自身向けに、伝統柄をふまえた上でよりカラフルに美しく簡単に着られる新作民族衣装を売り出した。民族衣装は、かつては母や妻の手作りであったが、すでに次世代への技術伝承は途絶えている。一方で、村内では春節や節日の時、特に年長者に挨拶に行く時や結婚式への参列時には民族

衣装を着るという習慣が続けられており、経済条件の向上にもなって、人々は民族衣装一式を購入するようになっていく。筆者も2016年に茂県地域の店で一式を約600円で購入した。小さな直売店ばかりがワンフロアーに並ぶビルがあり、店主の若い女性がその場で製作し、販売していた。これは、合作社には入らず、独立して羌繡を製作販売する新しい型である。

(3) 伝承のための技能訓練所の設立と高等学校専門課程への導入

四川美術学院の鍾茂蘭らの調査によれば（2009年）、被災直後の状況は次のようである。すでに多くの「針法」や図案がみられなくなり、1970年代まで存在していたものはほとんど消えていた。若い女性の多くは羌繡ができず、民族衣装も着たがらなかった。40歳以下の女性で羌繡ができる者は少なく、大部分が県域で機械刺繡の前掛けを買うので、どれも地域の特徴はなく一様で、地域性はほとんど感じられない [鐘ら 2012: 162]。

陳文苑 [2017] によれば、茂県では、阿壩州興繡職業技能培訓学校、茂県羌寨繡坊、西羌繡坊專業藝術連合会の3つの訓練所が設けられた。年に1～2期、各期100人、学生の条件は羌繡学習を希望する者で、每期9月24日から10月22日まで30日間、午前4時間半から午後3時まで授業を受ける。2006年から2016年まで受講者総数は約1,000人。生活補助として1日100元が支給される（2016年）。省級伝承人のZによれば、3,000元的生活補助を得るためだけの目的で来る者も少なくなく、学生の学習意欲は概してあまり強くない、効果も薄い [陳 2017: 7]。

このほか、伝承人たちは以下のような伝承活動も行っている。李興秀（1961年生、省級）は、企業経営のかたわら、企業内に「羌族刺繡技能培訓班」を開き、授業を担当（2004年）。陳平英（1957年、省級）は四川文化産業職業学院服装專業の民間美術課で羌族刺繡針法を教えた。王露群（1963年、省級）は2008年10月阿壩州主催の「羌族婦女刺繡培訓班」で毎月1期、各班120名で、若い女性を対象として3年間教えた [鐘ら 2012: 162-175]。

総じていえば、40歳以上の農村女性にとっては、年齢的にも安定した就業機会がほとんどないこともあって、羌繡は新たな現金収入源として有効であり、技術訓練は羌繡技術の向上に一定の効果がある。ただし、低収

入のために最低限の生活は維持できるものの、貧困脱出にはいたっていない。一方、30代以下の女性にとっては、義務教育あるいはそれ以上の教育を受けていることから専門的な職業や、羌繡より収入のよい就業機会を得ることが可能であり、あえて収入の少ない羌繡製作者という選択をする者は少ない。

羌繡の伝承については、チャン族女性が必ず習得すべき技術と位置づけるのではなく、高い芸術性と経済的な価値を持つ特殊な技術として、他の専門技術と同等に専門学校で学び、習得者には相応の専門職として就職できるような仕組みの開設が急がれる。

(4) 刷新の試みとブランド化

羌繡に関わる新しい試みは、上述の旧世代の传承人だけではなく、新世代の传承人によっても進められている。例えば、1990年代生れの張居悦の活動については、「90后美女回到大山、改变了60多个家庭的命運」（2017年ネット）の記事で次のように紹介されている [趙毅平 2019 : 27]。

張居悦は1990年代に理県薛城で生まれ、羌繡が身近にある環境のなかで育った。成都航空職業技術学院に進学したが、在学中から故郷の羌繡の工芸品をネットで販売する一方、理県政府主催の羌繡培訓班に参加し(2013年)、さらに茂県や汶川県、陝西の鳳県等の羌繡を見て回った。2014年大学卒業後は成都の羌繡企業で働きながら、自作の羌繡製品を路地の屋台で売り、好評を得た。ネットで企業の注文を受けるようになったため企業を辞め、郷里の薛城で薔悦藏織羌繡專業農村合作社を設立した。県政府からは創業基金借款と場所の提供を受けた。社員は、常勤20~30名と非常勤100名あまりで、月収は出来高制で数百~2,000元。社員は、かつて村の婦女連合主任であった母の人脈を頼りに各村をまわり、一人一人の技術をみながら声をかけて集めた(2018年)。企業や消費者のニーズに基づく新しいデザインや型の製品を考案し、全国から注文を受けている。また観光地である理県桃坪寨に羌繡館を開き、1, 2階で展示や販売、3階で製作体験(DIY)プログラムを実施。目下の課題がブランド化や商業戦略の欠如

であることを強く自覚し、上海公共芸術協同创新中心（簡略 PACC）⁽⁹⁾で一月の教学を経て、設計の共同開発や公共芸術作品「百鳥林」の製作に参与、清華大学の非遺研培班にも参加し（2018年）、山西や広東、上海等の博物館や伝統工芸革新の企業を訪問して研鑽に努めている〔趙毅平 2019：27-30〕。

旧世代の李興秀と新世代の張居悦の2人に共通するのは、羌繡を女性の就労と常に結びつけていること、羌繡は蜀繡のように商品としての歴史がなく洗練されていないため、伝統をふまえた新作の創出が急務であることを強く自覚している点にある。特に、新世代の張は、大学教育を受けたことで上海や北京という中国の代表的大都市での研修や研究機関との共同作業を積極的に推進し、ブランド化による外部への発信力を重視している。

小結

本稿では、チャン族社会における貧困脱出と女性の就労について、羌繡を事例として、筆者の2016年までの現地調査による一次資料と、中国側で報告された政府の通知や数値、論文などを基に、ジェンダー論的視点から分析を試みた。

羌繡に関する中国側の論文は、羌繡が被災後の伝統文化の復興と扶貧対策を目的とした政府プロジェクトの象徴とされたために、中央政府および地方政府の主導による施策とそれに連動した民間の動向をテーマとするものが多い。しかし、政府によって対象とされた農村女性は「家に居て羌繡を副業とする女性」という旧来の「男耕女織」型にステレオタイプ化されており、近年の変化する女性と就労実態からはかなりのずれがみられる。本稿では、政府の脱貧困プロジェクトが被災後数年間は成果があったものの、それ以降は成功しなかった原因の一つに、就労に関する女性の意識の変化が政策に反映されていないことを指摘した。

(9) 上海大学上海美術学院は2014年末の「羌繡伝承与创新設計」のもとで、2015年1月PACCが「羌繡伝承教学活動」を推進し、張居悦を招いて教学と共同研究を行った。この時に紹介された転々菊と羊角花の図案を基に新作を作り、「羌繡文創」として売り出し、「羌繡網紅」上で好評を得た。2015年4月「羌繡伝承人と設計師跨界交流系悦活動」で羌繡工作营を開始〔章 2020：70〕。

さらに本稿では、羌繡の力、売る（商品化）という視点から、チャン族社会における羌繡と女性の意味について考えた。羌繡の力とは、第1章で論じた伝来の呪力である。雲雲鞋伝説は、チャン族の史詩のなかで神と祖先の力を語る、最も有名な「羌戈大戦」「斗安珠」「大禹治水」の後付け譚として作られ、雲紋は白石と同様に神の力を表し、それを身に着けた者を守る。女性が嫁ぐ時に多くの羌繡鞋を持っていくのは、この家族を守る力がもたらされることを意味しており、呪力を内包する羌繡は無償で贈与するものであって、売り物ではなかった。

では、製作者は贈るから売るへの転換をどのように意識しているのか。現在も、年長者が身近な新生児のために製作して贈られる羌繡製品は、特別な意味をもつものとして人々に好まれている。筆者の現地でのインタビューによれば、身近な者へ贈る、呪力を込めた羌繡を真正とし、売り物を非真正とする意識上の区別がなされているのではないかと思われる。

ところで、羌繡とチャン族女性に関しては、羌繡とともに「男耕女織」という漢族の伝統的概念も伝来された。かつての漢族社会では、女性は家庭内で働くという「男耕女織」意識が人々の心に深く刷り込まれていた。一方で、女性たちが家庭で請け負う機織りや糸繰、刺繡などの「女紅」（女性の手仕事）は、副業として家庭に重要な収入もたらしたばかりでなく、19世紀末には珠江デルタの製糸工場で女工という職業もうみだした。珠江デルタでは、製糸工場の女工の中から経済的自立を得て結婚を拒否するという「奇習」に参加する者も現われたという [岸本・宮嶋 1998 : 332]。これは、経済的収入を手にした「働く女たち」の自立する姿を語るものである。女性の就労について多様な視点から考えることを、今後の課題としたい。

付記

本稿は、愛知大学国際問題研究所プロジェクト「中国の「新たな都市化」を考える」（2015年度～2020年度（2016年、2018年度は学外研修のため活動休止）代表者：松岡正子）の成果の一部である。

参考文献

(掲載順は、中文は拼音、日文はローマ字綴りによる)

- 陳文苑 (2017) 「關於四川茂県羌繡伝承与保護的思考」『西華大学学报 (哲学社会科学報)』第36卷第5期 6-10
- 馮敏 (2010) 『扎巴藏族——21世紀人類学母系制社会田野調査』民族出版社
- 戈大勇 (2020) 「羌族地区精准扶贫工作中加強羌繡的伝承与応用研究」『大衆文芸』36-37 155
- 岸本美緒 (1998、1990初版) 「結婚しない同盟——広東製糸女工の人生設計」『明清と李朝の時代』中央公論社 332-339
- 李福清・白嗣宏訳 (1992) 「漢族及西南少数民族伝説中的諸葛亮南征」『民族文学研究』(1992-4-30) 85-94
- 孟燕・李錦・耿静・鄭風編著 (2014) 『羌族服飾文化図志』北京：中国社会科学出版社
- 西嶋定生 (1975、1966初版) 「明代における木綿の普及について」「中国初期綿業の形成とその構造」『中国経済史研究』東京大学出版会 513-872
- 松岡正子 (2017a) 『青蔵高原東部のチャン族とチベット族——2008汶川地震後の再建と開発』(論文篇・写真篇) あるむ
- 松岡正子 (2017b) 「チャン族における婚姻慣習の記憶——史詩「木吉珠和斗安珠」と入婿婚」『歴史と記憶——文学と記憶の起点を考える』あるむ 195-218
- 松岡正子 (2020) 「四川アルス・チベット族におけるJOと移住伝承」『グローバルな視野とローカルな思考——個性とのバランスを考える』あるむ 206-310
- 松岡正子 (2021) 「チャン族の「家族」——四川省阿壩藏族羌族自治州茂県大瓜子寨を事例として」『中国21』Vol. 54 126-155
- 王通・陶钰 (2020) 「合作社二元組織結構及其合作理性——阿壩州羌繡生産合作社為例」『阿壩師範学院学报』第37卷第3期 46-52
- 四川省編輯組 (1986) 『羌族社会歴史調査』四川省社会科学院出版社
- 謝宏図 (2016) 「北川羌繡の産業状況調研与発展探索」『裝飾』2016年12期 (総第284期) 118-119
- 詹穎・姜旭 (2014) 「阿壩州羌族服飾与羌繡保護現状及对策分析」『四川文化産業職業学院 (四川省幹部函授学院) 学报』2015年第2期 6-29
- 章莉莉 (2020) 「非遺活態伝承：重鏈手工芸和現代生活需求——章莉莉談設計

与扶貧」『中国設計』070-074

趙毅平 (2019) 「接統傳統、繡出新生：羌繡傳承与創新的年輕力量」『裝飾』
2019-3 (總第311期) 27-31

鄭舒月・程浩・張雨菲・顏莉 (2017) 「分析北川縣羌繡当前發展現狀」『生態環
境保護』2018年9月下半月刊 191

中国民間文学集成全国編輯委員會・『中国民間文学集成・四川卷』編輯委員會
(1998) 『中国民間故事集成・四川卷 (上下冊)』中国 ISBN 中心出版

鐘茂蘭・範欣・範朴 (2012) 『羌族服飾与羌族刺繡』(中国少数民族服飾卷) 中
国紡織出版社

鐘瑋 (2017) 「羌繡本土手工藝資源再認識与文化創意設計之轉化」『包裝工程』
第38卷第16期 190-194